

京都大学所蔵の建築図面

- 重要文化財(歴史資料)「ジョサイア・コンドル建築図面」と 「武田五一建築図面」「藤井厚二建築図面」-

京都大学大学院工学研究科建築学専攻助手 岸 泰子

2006年6月、京都大学所蔵「ジョサイア・コンドル建築図面」が重要文化財(歴史資料)に指定された。

ジョサイア・コンドル博士(1852～1920)は、工部大学校(東京大学工学部の前身)で教師として辰野金吾などの多くの建築家の教育に尽力する一方、自ら鹿鳴館や綱町三井倶楽部の設計を手がけるなど、明治期から大正期にかけて日本の近代化に貢献した建築家として有名である。

そのコンドル博士が設計した綱町三井倶楽部のほかニコライ堂(いずれも現存)や独逸大使館、島津邸本館や古河邸本館を含む28件計468枚の建築図面が京都大学に所蔵されている。コンドル博士関係の資料としては日本最大にして最良のコレクションと評されている。図面の種類も平面図、立面図、詳細図など多岐に及び、さらにはコンドル博士のサインが記された図面や、彩色を施した美術的にも価値が高い図面も含まれる。

また、本コレクションに関しては、納入の時期や購入価格(備品としての評価額)、寄付者(納入者)氏名などの資料の来歴が明確である。京都帝国大学工学部建築学教室の記録である『備品監守簿』という当時の備品台帳から、古市公威氏より納入され、大正11年(1922)3月28日付で備品として登録されたことが判明している。工学部建築学教室の創立は大正9年(1920)であり、創立からきわめて早い時期に当教室に納入されていることから、建築教育のための教材として使用する計画があったのではないかと

考えられる。

本コレクションについては、調査報告書や先行研究のなかで目録が作成されていたが、今回、文化庁文化財部美術工芸課のご指導のもと、京都府教育庁文化財保護課、京都市文化市民局文化財部文化財保護課のご協力を得て、京都大学大学院工学研究科建築学専攻建築史学講座の教員や学生も加わり、改めて調査を行った。その結果、明治期の最先端の建造物に関する重要な資料群として文化的・歴史的・美術的価値が高く、大正期から昭和初期にかけての大学における建築学教育の実情を知りうる資料としても価値が高いという再評価をうけた。

また、建築学科・建築学専攻には「ジョサイア・コンドル建築図面」の他にも、歴史資料を含めて様々な建築図面が所蔵されている。ここでは、

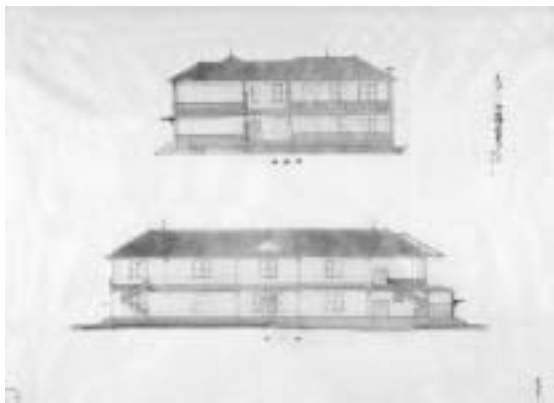


東京復活大聖堂(ニコライ堂)聖堂設計図
立面(背面) / ジョサイア・コンドル建築図面

京都大学建築学科にゆかりの深い資料群について紹介する。

まず、近年、「武田五一建築図面」52点が寄贈された。武田五一は京都帝国大学建築学教室の初代教授であり、1928ビル（旧毎日新聞社京都支社）や京都市役所などゼセッションから表現主義まで幅広い様式を駆使した建築を数多く設計した建築家でもある。京都大学百周年時計台記念館や工学部建築学教室本館も武田の設計によるものである。しかし、武田五一の建築図面は現存するものが少なく、京都大学にも全く残されていない。寄贈者の山口克氏は、御親族が武田と共に仕事をされていた関係から図面を譲られ保管されていたという。京都電鉄五条待合所、同志社女子部教場、京都白河杉本氏別邸、艇庫、第二回家庭博正門、二階家、博覧会陳列館、大阪専修簿記学校に関する平面図や立面図のほか詳細図も含まれる。また、これらの図面には「工学士武田五一設計證」の印があり、製作日付も確認できる点も興味深い。大正期から明治初期の武田の建築活動を知りうる貴重な資料であるといえよう。

さらに、同じく大正期から昭和初期にかけて建築学教室で教鞭をとった藤井厚二の図面「藤井厚二建築図面」も多数所蔵している。写真も



同志社女子部教場新築設計図
立面「武田五一建築図面」

含めて総数948点に及ぶ大コレクションである。藤井厚二は建築環境工学の研究者であるとともに、自ら実験住宅を建設し研究成果を実践した。代表作である聴竹居をはじめ、大山崎の茶室や島津邸に関する図面が多数残されている。また、家具の図面や床の間に関する図面も含まれており、近年では住居学やインテリアデザイン学の分野からも注目を集めているコレクションである。これまで資料の整理が十分に行われなかったため、その全容を把握するには至らなかった。そこで、今回、改めて調査を行い、目録を作成した。

なお、以上の3資料群については、工学研究科建築学専攻建築史学講座が編集した『京都帝国大学工学部建築学教室旧蔵建築教育資料』に目録が所収されている。

このように、京都大学には創立以来蒐集されてきた歴史資料が多数あり、大学の研究教育活動の歴史を知りうる貴重な資料群も多い。また、文献史料だけでなく、特に明治・大正以降の科学・工学史を知る上で必要不可欠な資料も多数所蔵されている点も重要である。

今後は、これらの科学・工学関係の歴史資料にも詳しい専門家の育成が早急な課題といえよう。さらに、建築図面については、法量が一定ではなく保管が難しい上に、色彩が施されているものも多く、図面（資料）の劣化が危惧されている。特に、現在、建築学科図書室に保管されている「ジョサイア・コンドル建築図面」に関しては、文化財として適切な環境が保たれているとは言い難い。湿度や温度、さらには照度などが適切な条件下において保管され、また閲覧にあたっては上記の環境設備の他に十分な広さの場所を確保されることが望ましいという指導を受けている。今後は、これらの環境が改善され、さらに本稿で紹介した資料が研究教育活動において大いに活用されることを望みたい。

（きし やすこ）